

発泡スチロール(EPS)の優れた特性で、地球環境を守ります

● 発泡スチロール協会 ●

発泡スチロール協会は、ビーズ法発泡スチロール (EPS) の正しい理解の普及活動を行うと共に、EPS を多く使用する全国の卸売市場や資源再生業者との連携協力のもと、機械設備の開発、再資源化を推進しています。また、海外関係諸外国との情報交換および連携するなど活動は多岐にわたります。

発泡スチロール協会では、毎年7月の「海の日」を「発泡スチロールの日」と制定し、全国の会員が各地でPR・啓発活動を実施しています。

「発泡スチロール協会」の前身である「発泡スチロール再資源化協会」は、廃棄物問題が深刻化している状況に対処するため、EPS 原料メーカーの組織「発泡スチレン工業会」と、EPS 成形メーカーの組織「日本フォームスチレン工業組合」が協力して、1991年に設立されました。

発足以来、「もっと、もっとリサイクル」を合言葉に「循環型社会」の構築を目指し、発泡スチロール (EPS) のリサイクル関係各位との連携・協力のもとで活動をしてきました。2010年には、事業と組織の見直しを行い、「発泡スチレン工業会」、EPS 原料メーカーおよびEPS 成形メーカーが建材用途の普及拡大のために設立した「EPS 建材推進協議会」、この両者活動を含めた活動母体として「発泡スチロール協会」と改称して再スタートしました。

近年、地球温暖化防止のCO₂削減対策として「低炭素社会」がクローズアップされ、「循環型社会」と「低炭素

社会」を両立させる「持続可能な社会」の実現が、地球規模の大きな課題となっています。そこで発泡スチロール協会では、「持続可能な社会」実現に向けて、発泡スチロールの特性 (断熱性、省資源性、軽量性、緩衝性、リサイクル性、耐久性、加工性) を生かして、本業界の健全な発展と、社会への貢献を目的として活動してきました。

省資源な素材でCO₂削減に貢献しています

一般的に発泡スチロールと呼ばれているものには、製法や用途の違いにより3種類があります。中でも皆さんの生活の中でなじみの深い発泡スチロールはEPSとPSPとがあり、発泡スチロール協会はEPSを取り扱う団体です。

発泡スチロールは1950年にドイツで開発され、日本では1959年より国産化されました。当初はコルクの代替品として、冷凍・冷蔵用に使われてい

ましたが、発泡スチロールの持つ優れた特性を生かして、生鮮食品の輸送箱や家電やOA機器の緩衝材、住宅建材など私たちの生活の身近なところで使われるようになりました。

発泡スチロールは、白くて軽いのが特徴で、石油からつくられたポリスチレン (PS) を小さな粒状にした原料ビーズを約50倍に発泡させてつくられるため、製品体積の約98%が空気です。さらに、断熱性に優れたEPS建材を住宅建材として使用することにより、冷暖房効率を上げ、エネルギーの消費を抑えることで、温室効果ガスであるCO₂の発生を抑制する効果を発揮します。

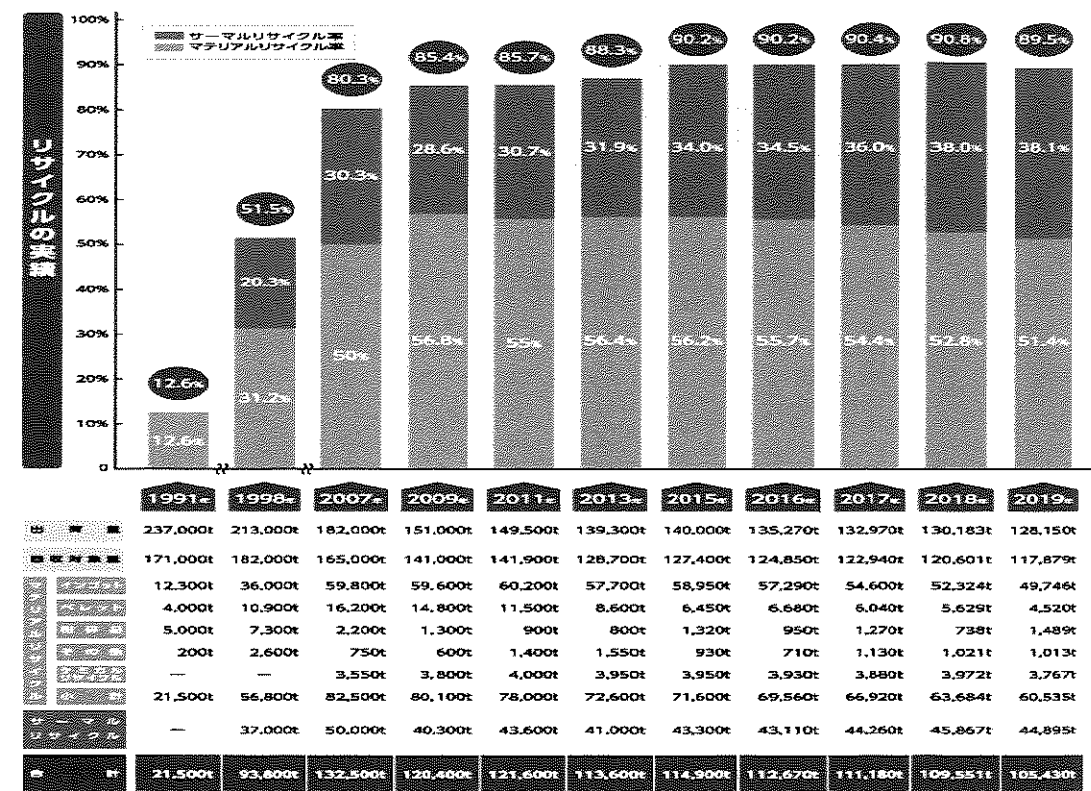
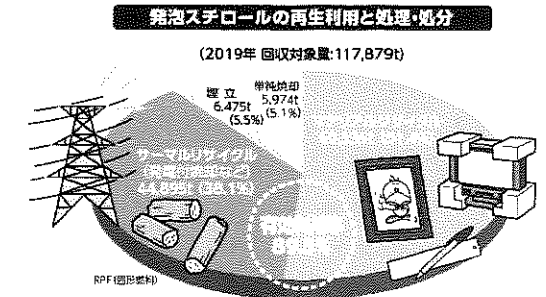
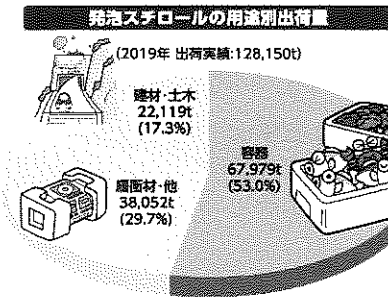
発泡スチロールの持つさまざまな特性が、CO₂削減やリサイクルなどの環境問題に対しても『低炭素社会』『循環型社会』を両立させる『持続可能な社会』の実現へも貢献しています。

幅広い用途と、高い有効利用率
89.5%

優れた製品特性により、発泡スチ

ロールは生鮮食品の物流容器、家電製品の梱包材、建築用断熱材など、幅広い用途で使われています。その使用済みの発泡スチロールは、さまざまな方

法で再利用されていて、その有効利用率は年々右肩上がりとなり、ここ5年間は約90%という高い有効利用率を達成しています。



シロクマキャンペーン 2020年度も実施しました

シロクマは、海水の上でエサとなるアザラシなどを捕まえています。その海水が地球温暖化の影響で溶けてしまい、エサ場が減少しています。今後20~30年の間に、シロクマが絶滅してしまうという説もあります。

発泡スチロール協会は、地球温暖化

の影響により絶滅が危惧されている「ホッキョクグマの保護」と「ストップ!地球温暖化!」のメッセージを込めて、「海の日」でもある「発泡スチロールの日」に、CO₂削減に貢献する発泡スチロールの箱に入った新鮮な魚介を、「シロクマ」の愛称で親しまれる全国のホッキョクグマへプレゼント中です。

シロクマキャンペーンは2008年か

ら開催され、今年で第13回目となり7月21日(火)から8月7日(金)の期間、北海道から鹿児島県にある17カ所の動物園・水族館において順次実施しました。

